

第 11 回 練馬区幼保小連携推進協議会 要点録

開催日時	平成 30 年 5 月 23 日（水） 午後 3 時 30 分～午後 5 時 00 分	
会 場	練馬区役所本庁舎 12 階 教育委員会室	
出席者	会 長	教育長
	委 員	田中泰行、戸田了達、中島眞佐美、桑原久美子、立川由美子、世古徳浩、中村直人、堀和夫、小暮文夫（敬称略）
	事務局	教育施策課長、学務課長、こども施策企画課長、保育課長、教育指導課指導主事（幼稚園担当）
プログラム作成 アドバイザー	酒井朗	
調査員連絡会委員	高橋浩美、日高文子、根本裕美	
傍聴者	0 名	
案 件	1 ねりま接続期プログラム（案）について 2 幼保小連携の取組について 3 その他	

会長

平成 24 年 4 月の組織改正により子育て部門が教育委員会に移管されたことを契機として、保育所、幼稚園、小学校の連携をぜひ強めたいという思いを持ち、区立・私立保育所、区立・私立幼稚園、小学校と、公立・私立全ての代表の方にご参加いただき、連携について考えていくために幼保小連携推進協議会を設置した。

24 年 5 月の第 1 回協議会開催時から 3 年間かけて幼保小の連携が一定程度進んだという成果を 27 年 12 月の協議会で確認した。その際、下部組織の調査員連絡会は継続し、接続期プログラムの案ができた段階で改めて本協議会を開催する仕切りを行った。本日は、調査員連絡会での成果を確認するため協議会を開催した。成果である接続期プログラムについての説明後、この会で承認という形を取りたい。

では、第 11 回幼保小連携推進協議会を開会する。

まず、協議会委員の名簿の順に、委員の方々から自己紹介を。

<各委員自己紹介>

会長

では、次第に沿って案件 1 のねりま接続期プログラム（案）から進める。

また、協議会の開催がない間にも、幼保小連携については着実に実施していたが、この間の幼保小連携の取組について案件 2 として掲げている。事務局から一括で説明を。

<事務局 案件 1・2 について説明>

アドバイザー

接続期プログラムについての説明の前に、事務局説明を補足する。資料3の取組実績は大変素晴らしい。他の自治体では、幼稚園と保育所と小学校の先生が一堂に会して研修をするという事はなかなかなく、これが継続的に何年も行われていることそのものが既に幼保小連携の大きな成果だと思う。こうした基礎があり、練馬区では幼保小の先生方が集まって「ねりま接続期プログラム」を検討した。

では、プログラムの趣旨、内容について説明する。

まず、接続期のプログラムの「接続期」とは何か。目次の下(参考)で「5歳児の10月から小学校1年生の5月上旬まで」を接続期と定義した。幼稚園や保育所から小学校への、あるいはこども園から小学校への接続をいかに滑らかに図っていくかということに非常に重視して作っている。ただ、この期間だけのプログラムを作ればそれでいいのかということが、当初検討課題となった。その際、やはり接続期に至るまでの0歳児からの子供の育ち全体を共有することがまず大事だろうということになり、最初に0歳児から小学校1年生の5月上旬、接続期の終わりまでの子供の姿を丁寧に追っていく項の一つ設けた。その上で接続期の具体的な指導を行うということである。また、練馬区のプログラムは、家庭との連携をどう図っていくのかというところがもう一つの重要なポイントであり、それも含めての試みとなる。年齢別実践例では、先生方には本当に様々な写真を撮っていただいた。ここでは、各年齢ごとに、こういった保育や指導の実践がなされ得るのか、なされているのかについて、具体例を示しながら説明している。

それでは、「発行にあたって」から順に説明する。本プログラムでは「幼稚園と保育所と小学校がまず何よりも相互理解を深め、子どもの育ちと学びの連続性を大切にすること」が重要だとしており、それを一つの大きな柱としてプログラムの策定を進めていった。これも、接続期だけでなく、0歳児からの子供の姿と家庭との連携についてもまとめ、それを簡略化して一つにしたものが下のイメージ図となる。接続期のコアとなるプログラムとともに0歳児から中学校までが含まれており、義務教育の修了段階までを見通した子供の育ちを支えていくプログラムとして構成されている。もう一つは、家庭と連携し、家庭を支援しながら進めていくということが重要なポイントになるかと思う。

「0歳児から小学校1年生5月上旬までの子どもの姿」というものを一覧表にするとこういった形になった。完成までには何十回もの協議を行った。まずいくつか区分けをし、2ページの「学びの芽生え」「生活習慣」「人との関わり」「運動」の4つの項目に分けて、それぞれの年齢期の子供の育ちをきちんとまとめていく作業をした。この表では、それぞれの項目および全体のねらいについてまとめている。

3ページの表の一番上の項目では、それぞれの年齢期をどのような時期であると表現するかが、当初一つの検討課題であった。0歳児は保育所での「保育者と出会い安心感が育まれる時」、1歳児は「安心できる環境の中で行動範囲を広げていく時」、2歳児は「身近な人・物・ことへの関心が生まれはじめる時」、3歳児は「気の合う友達との関わりが増える時」、4歳児は「クラスのみんなですることが楽しめるようになり、友達とのつながりが生まれる時」。ここではやはり仲間・友達が非常に重要になってくる。5歳児は「慣れ親しんだ場所で主体的に生活を進めようとする時。就学への期待をもつ時」となる。1年生では「新しい場所での生活に不安と期待をもって新しい生活をスタートする時」となっており、1年生当初はこれまでと大きく環境が変化するため、ここをさらに、最初の2週目までと2週目以降から5月上旬までとを分け

た形でまとめている。これらの期ごとの性格づけに沿って、それらの時期に子供の育ちがどうであるかということを下にまとめたものとなる。3～5ページに渡って、「学びの芽生え」「人との関わり」「生活習慣」「運動」としている。

具体例として、4ページ「人との関わり」では、このときの子供の育ちはどういう育ちなのかを一つひとつ丁寧に、先生方からお言葉をいただいてまとめたものになっている。「人との関わり」については、友達同士で協同し合う関わりの部分、他者への信頼、社会規範、ルールの習得、それぞれについてまとめた。

一番上の「協同」では、仲間と関係を持ち、協力し合う関係にどう入っていくのかを、0歳児から順番に記載している。最初は、まず自分の世界、外界を認知し始める時期である。1歳児は、生活や遊びの中で、保育者や友達が行っていることに興味を持ったり関わったりしようとする時期。2歳児は、ひとり遊びを楽しみながら、保育士が仲立ちとなることで友達と遊ぶこともある時期。3歳児は、保育者や友達と一緒に活動することを喜ぶ時期。4歳児になると、クラスの友達とすることの意味がわかってくる。つながりや気持ちがわかり合える快さを感じる。この辺で他者との関係がだんだん芽生えてくる。5歳児になるとさらに発展し、思いや考えが互いに違ってうまくいかないときがあっても、友達と工夫をしたり折り合いをつけたりして課題を乗り越えようとする。これを受けて小学校1年生の入学の時期がある。初めて出会う先生や友達と進んで関わろうとする。先生や友達に進んで挨拶をする。それを受けてさらに、友達と仲よく集団生活を送る。気持ちのよい挨拶ができ、言葉遣いに気をつけて明るく接するといったような形で、子供の姿がどんどん変わってくる。

これをこうした形でまとめたひとつの理由は、小学校の先生には、5歳児までの育ちをぜひ見てもらいたいということがある。保育所の先生方には、小学校の子供たちがその後どうつながっていくのか。あるいは幼稚園の先生方には、幼稚園に入るまでの子供たちの姿、あるいは小学校の姿。園・小学校それぞれの立場に沿って、それ以外のところでの子供の育ちを理解してもらおう。そういうところを大きな目的で作っており、できる限りそれがわかりやすく整理して加えられるような形の表の作成に努めた。

次にそれを踏まえて6ページから具体的な「接続期の指導および家庭との連携のポイント」となる。こちらは先ほどの4つの要旨と項目分けに従い、特に接続期の中での指導のポイントと家庭との連携のポイントを細かく示している。各園・小学校ではこれをご覧いただき、この時期には、こういうところが指導のポイントとして大事だということを理解していただきたいと思う。これがまさにプログラムの中核になると思うが、これを見て各園での保育あるいは小学校での指導に役立ててもらいたいというのが、本プログラムを作った思いとなっている。

9ページには家庭との連携を細かく記載しているが、5歳児の1月から3月、就学直前のところでの家庭との連携の仕方について特に細かく記載している。一番上の「個人面談では、一人ひとりの成長や課題などについて話し合い、個性を活かしながら、就学に向け自信をもって残りの園生活を送れるように、具体的な援助について保護者と共通認識をもつ」は、園の先生方にこの部分を留意して、保護者とかかわってもらいたいということである。これに対して小学校1年の受け入れ側は、「小学校生活が『ゼロ』から始まるのではないことや、徐々に慣れていくようなスタートカリキュラムを組んでいることを保護者会や学年だよりなどで伝え、保護者の不安や疑問を解消できるように努める」としている。よくご存じの先生も多いと思うが、改めてこういう形で明記した。初めて低学年を担当する先生方や他の区からいらした先生方が、こういうことなのだ改めて接続期の部分の共通理解を図っていくというものになる。

3番目の年齢別実践例では、文字だけでは内容が抽象的でわかりにくいいため、各年齢期の子供の育ちを見ながら、そこでの保育・指導の実践の様子を、具体的に写真を入れながらまとめた。各施設の方や小学校の先生に見てもらおうと、0歳児からの子供の育ちが一通りわかり、勉強になると思う。

まず、0歳児のところでは、「子どもが経験している内容」、「援助のポイント」、「家庭との連携」を書いている。それぞれの子供の経験している内容の横に、どういう姿なのか、それはどういう項目として捉えることができるのかといったことを細かく記載している。

3歳児の実践例では、3歳児は、保育所もあったり幼稚園入園の時期であったりもするが、こうした中で、どういう姿でどういう保育の実践例があるのかといったことを記載している。みんなと一緒にということで、例えば冒頭には「きれいに手が洗える、順番も守れる」という生活の一場面、みんなで遊ぶ場面。その下にも、みんなと協力して砂場遊びをするという場面があり、それぞれのところで、どういう子供の育ちが見られるのかということを細かく書いている。またその下には援助のポイントとして、どういった点に配慮しながら援助していくのかといったことを簡潔に記載している。

一番最後は、家庭との連携となる。幼稚園の場合は「子どもが初めて集団生活を体験する場合」、「子どもの様子を伝え合い家庭との連絡をより丁寧に行いながら、子どもや保護者との信頼関係を構築していく」といった留意点を書いている。こうしたことを、4歳児、5歳児で記載している。5歳児は非常に多様な姿があるため、劇遊びの場面と、係の引き継ぎの場面の2つの実践例を載せている。

これを踏まえて、小学校1年(入学～2週目)の実践例「給食が始まるよ」に続く。学校生活が始まる最初の姿、そこでの子供の例となり、どういう指導課題があるかということや援助のポイント、家庭との連携を書いている。

19ページは、2週目以降のさらに時期が進んだ実践例を記載している。これを見るだけでも、先生方はこの時期子供にどういう配慮をし、どういう姿を期待しながら子供と関わればいいのかということが一目でわかるようなものになっている。

最後は、当時の学習指導要領と保育所保育指針、幼保連携認定こども園教育・保育要領で、それぞれ幼児期の終わりまでに育ってほしい姿というのが明示されたため、先生方にご理解いただきたく、10の姿について列記した形として、幼稚園教育要領と保育所保育指針を参考資料として提出した。あくまでこれは接続期の第一歩だと思っている。こうした形で共通理解を図り、各園・小学校でつながっているということを前提に、様々な配慮・援助のポイントや家庭との連携に留意しながら各所で実践がなされることで、実質的に連携が具体化していくものだと理解している。

事務局

続いて、調査員連絡会の幼稚園・保育園・小学校各部会でそれぞれ話し合われた内容等に関して、代表の先生方から説明を。

調査員

保育園部会は0歳児から3歳児までを担当した。先ほどの酒井先生のお話のように、小学校に上がるまでに少しでも段差をなくす。そのためには、0歳児から5歳までの6年間、家族と多くの職員から愛情深く育児され、保育され、心身ともに成長・発達し、小学校に上がってい

く。そうした思いで作成した。

今は育児の不安を持つ家庭が大変多いため、その点を考慮した家庭との連携。そして、先ほどお話があったように、0歳児から一つひとつ積み重ねて年長につなげ、小学校に引き継いでいくのだという思いで、皆さんと話し合いながら作成した。

その成長発達の基本となる0歳児から3歳児だが、0歳児は、保育士と1対1で信頼関係を育みながら、自分を受けとめてもらえる安心感を基本に、生活リズムを整え、寝返りやはいはいと運動発達、そして離乳食を進める時期になる。

1歳児は歩行が完成し、あちこち興味関心を持ち探索活動を楽しみながら、不十分ではありながらも自分1人でやってみたいという意欲が大きく成長し始めるときとなる。

2歳児は、第1次反抗期で、いやいやというような時期が始まり、駄々をこねたり自己主張が強くなってきたりする。この時期は、いつも大人の言うことばかり聞くのではなく自分にも意思がある、そういった主張をし始める時期、人の様子を見てまねて、その中から友達とも少しずつ楽しく関わられるようになってくる時期だと思っている。

3歳児に関しては、今回、小学校への接続に準ずるくらい難しい年齢であるということに気付いた。保育園での3歳児は、0歳児から数えて4年目と、保育園の中では中核の位置となる。私立幼稚園では入園1年目という初めての集団生活の場であり、公立幼稚園ではまだ入園していない時期である。このため3歳児に関しては、苦慮しながらの作成という部分があった。その点を考慮してご覧いただければと思う。

調査員

幼稚園部会では4歳児と5歳児を担当した。4歳児と5歳児は、区立・私立幼稚園、保育所、様々なところから集まっている。そのため、共通項をどのように見出すかというところで、私立幼稚園の先生方と、以前小学校の校長先生をされていた先生にも加わっていただき、幼児期での本当に大事なことや育ちというところを話し合った。

施設によってそれぞれやり方は違うが、話し合う中で、就学前に大事にしておきたいことというのが、次第に共通になってきた。何よりも子供にとって大事なことは何かということを通して話し合うということがとても大事であり、これからの幼保小の連携でも、そういうことがプログラムを通してできていければと思う。

幼稚園部会は「接続期の指導および家庭との連携のポイント」でも、5歳児10月から3月末までということを書いたが、幼稚園が10月から3月の末までと、小学校は入学から5月の中旬までとなり、子供たちの姿を捉える際の双方のボリュームが異なっていた。そのため、詳しく接続期、就学前の姿を捉え、丁寧に5月の中旬までの小学校の姿をつなぐというところで、書き方としては難しかったが、読み解いていくと、つながりがよく感じられた。3学期の姿からという話も出たが、子供たち自身は10月くらいから小学校のことを非常に意識して期待する姿も見られ、交流もその辺から始まるというところもあるので、この形になった。

年齢別の実践例のところでは、区立・私立幼稚園や保育園があったりするが、話し合っていくうちに共通項が非常に見出しやすくなり、大事にしているところが共通になっていったと思う。そのため、就学前の子供たちの育ちは幼稚園・保育園の0歳児からつながっているということを、具体的な実践例の箇所を感じていただきたい。

調査員

小学校の記載は、この中ではほんの1か月となる。自分もこれまで長く低学年教育に携わっており、どちらかと言うと、小学校側は幼稚園・保育園から来た子を揃えたり、小学校の教育内容に合わせたりというふうに捉えがちであった。そうした点を校長先生方とも話し合った。

今、折しも学習指導要領改定に当たって、学びをつなぐということがよく言われている。もちろん小・中をつなぐのも大事だが、幼児期と小学校との学びをつないでいくことで子供たちが健やかに育つということが改めてここでわかった。

例えば18ページ「給食が始まるよ」では、幼稚園・保育園から来た子供たちは、お弁当の子、給食だった子、お弁当や給食を選べた子と様々だったため、学校のやり方に揃えるというのが今までの考えだったが、今回は幼稚園・保育園でのやり方も聞いた上で、小学校でのやり方を示した。また、幼稚園・保育所で行っているように、当番ルーレットを使って丁寧に絵で示したりすることで、子供たちが安心して給食当番に取り組めるということがわかってきた。また、こうした姿を家庭に伝えることで、小学校に入っていくいきなり当番ができるのかといった家庭の不安感にも応えることができた。そのあたりのところを、8ページの「生活習慣」で、これまでのことを大事にしながら、今日はこのようなことをやっていく、という資料とした。

19ページは実際の学校探検の学習場面である。生活科の中ではとても大事な学習活動である。探検の折の、人に尋ねる言葉遣いについて、各教科と連携を図りながらカリキュラムとして横のつながりを意図して行った。また、幼稚園・保育園で学んできた成果が本当に発揮されるということを捉えることにより、皆で学校を見て回って安心するというだけではなく、幼稚園・保育園で話し合いをするときには丸くなっていたことなどを思い出して活用する姿が見られた。横だけではなく縦のつながりで子供たちの学びを見ていくことにより、子供たちが一層学びを深められるということがわかった。スタートカリキュラムの際、練馬区の先生方に、入学前の学びはどんな感じだったのか見てもらえるような資料にする機会をいただき本当に感謝している。

事務局説明終了

会長

酒井先生や調査員の皆様のお話を聞いて、本当にご苦勞をおかけしたのではないかと思います。また、こうした成果としてきちんと表れたということに対して、本当に感謝を申し上げたい。では、「ねりま続期プログラム」案の説明について委員の皆様から何かご意見等あれば。

委員

「接続期の指導および家庭との連携のポイント」にも就学前教育カリキュラムにはない「運動」という項目立てがあるが、それは何か。

調査員

運動の部分は非常に悩んだところであった。本来、生活習慣と運動は同じ項目で書いていたが、0歳児から成長していくときには、はいはいをしたり立って歩いたりするところだが、運動面が自立していくには、こうした成長があり、欠かせないところであるため、より具体的に書き表すようになってきた。しかし、幼児期に入ったところで書き方を迷ってしまった。運動だけが幼児期から少し特別なもの(0歳から通したときに同じように書き表せなかった)に

なっていくかというところがある。例えば、運動は子供たちの成長に欠かせないものであるため、幼児期にスキップができるようになるといった方向で、0歳からと同じように、全身の運動の発達という意味合いで0歳児ではケンケンができるようになる時期だとまとめようかとも考えた。しかし、そうした書き方では、この時期にはそれができなければいけない、と読み取れてしまうのではないかとということで、こういう書き方になってしまった。

この短い期間で作るために、必死になって何回か集まってやってきたが、もう少し時間があつたら再度じっくり0歳から小学生までの発達を通して共通の書きっぷりで見たい。もう少しつなげて見たいということも考える。プログラムが配付された際には、そうした見方を見て、これを練馬区の教職員、保育士の皆さんと一緒に育てていくような使い方のほうがいいのではないかと思う。やはりこれはどうかと思った箇所は書き直したりすることができれば、生きた活用ができるような気がする。

調査員

今お話があったように、作成にあたっては保育園、幼稚園、小学校の部門ごとに分かれて話し合いを行った。そこで話し合いがされても、3つを合わせたときに、合わせた部分がうまくいかない部分があり、その調整にも非常に時間を費やした。今回はこの形にまとまり本当に安心している。発行して3年～5年経過した後、バージョンアップしたり、中身を深めたりするときに向けた第一歩という形として、自分たちも考えている。

委員

小学校の先生方に特に理解してほしいのは、様々な狙いや望ましい姿もあるが、幼児期から小学校に上がるためには、幼児期の5歳児までの集団生活、集団の中で個人的な体験をすることが非常に大事だということである。みんなで一緒にやる、揃えとか、一律一斉にということにはあまり価値を置かず、集団の中で個人的な体験をしながら、集団とはこういうことなのだとかわかってくる教育を目指している。これは保育所保育指針も幼稚園教育要領もそうだと思う。それが今度は小学校に入ると、集団としての行動や学びに価値がだんだん移っていくということが、一番難しいところなのではないかという気がする。そのため、やはり毎年1年生を受け持つ先生には、ぜひこれを熟読した上で、幼稚園・保育園の幼児の集団生活を見てほしい。我々も、小学校の先生がいらした際には、一人ひとりがやっている個人的な体験にはこういう意味があり、これが集団につながっていく、という話ができると思う。

委員

都教委からの就学前教育カリキュラムの改訂版、リーフレット、学習指導要領にはスタートカリキュラムが載っている。ただ、低学年担当の先生方はある程度就学前カリキュラムやスタートカリキュラムを理解していると思うが、高学年を担当する教員は関心が薄い。やはり私たち校長・副校長、管理職レベルで、今回作っていただいた接続期のプログラムの存在や、こういうことをやっているのだということを改めてきちんと周知しないといけないと思った。

また、幼稚園の園長先生方からプログラム参考資料にもある「10の姿」という言葉をよく聞いていた。幼稚園教育要領には「幼児期が終わるまでに育ててほしい10の姿」が記載されている。練馬区小中一貫教育では、小学校の教員が中学校の指導要領を見る機会はあるけれども、現実にはなかなか幼稚園の教育要領まで読む機会がない。このため、このプログラムの中に幼稚園教

育要領の10の姿が入ったことは非常によかったと思う。管理職から先生方に「10の姿」をしっかり意識してほしいということを話していきたいので、参考にして活用を図っていきたい。

委員

保育指針が4月から改定されたため、各保育園でも指針に則って全体の計画を見直したり、実践に生かしていこうという取組を始めたりしている。先生の説明を伺って、接続期の定義が明確になり、すっきりと理解できた。ここが接続期だということをポイントにして、職員とどう保育園で実践していくかということは、自分の中でも明確になった気がしている。

「接続期の指導および家庭との連携のポイント」については、接続期と合わせた実践をどう行うかというところでは、こちらを参考にしながら各園で実践していきたいと思った。

委員

素晴らしいプログラムを作っていただき、本当に感謝している。各年齢別の実践例に掲載された顔写真は、保護者の同意は取られていると考えてよいか。

事務局

保護者の了承済みである。

会長

接続期のプログラムをどう活用していくかということが、これから我々に与えられた責任である。スケジュールの中で、今後これを議会等に報告後に印刷し、学校・園のほうに配布するとあるが、今後の活用のあり方で何か考えや意見があれば、研修も行うのか。

事務局

先ほどの取組説明にあった、教育施策課主催の全体研修等での活用を考えている。

会長

プログラムの作成部数は。

事務局

冊子として製本化し、配付するものについては1,000部から1,500部くらいを見込んでいるが、ホームページからのダウンロードを可能にする予定のため、インターネットから印刷をするということであれば、データとしては広く供用するような形での提供が可能である。

会長

ホームページへの掲載は。

事務局

掲載する。

アドバイザー

各機関に配布するという話があったが、認可外の保育所や小規模保育所、家庭的保育者等、こういった研修の対象になりにくい方々にこそ読んでいただきたいというのが一つである。

また、保育所の子供が小学校に上がるときに最初に行くのは学童であるため、学童の方にも可能であれば送付してほしい。5歳児までどういう育ちであったのか、家庭とどう連携してきたのかがわかると学童でも随分参考になるかと思う。

委員

今まで何回か小学校、それから幼稚園・保育園と研究会で話し合いをしてきたが、毎年のように同じような話題が出てきてしまう。例えば小学校に行くと、靴を履きかえる際に座らないと履きかえられないとか、非常時のためにも立ったまま履きかえられるようにした方が良いのでは等の、生活習慣的な話題が多い。幼稚園では毎年長組を持つ職員もいれば、毎年担当が変わる職員もいるため、毎回同じ話が出てきてしまうことがある。そのため、例えば話し合いの際に「接続期の指導および家庭との連携のポイント」の7ページ「学びの芽生え」の5歳児（1月～3月）のところ、「クラスで取り組んでいることについて、それぞれが自分自身のこととして受け止めてアイデアを出し合っている姿を認め」や、今年入ってきた1年生が本当にこういう姿なのか等、毎回少しずつ異なった具体的なテーマを出してもらえれば良いのではないか。そういう意味でも、このプログラムを使用してもらえるとありがたい。

会長

プログラムをベースにテーマを出し、新しい連携のやり方として進めていくことは非常に有意義だと思う。漠然と日々の出来事や生活習慣についての話を毎回行うのではなく、「今日はこの中のこの部分で議論をする」等、明確な目的を持って話し合うのは良いことである。

また、先ほど調査員の皆様から今後の進め方についての話があったが、やはり何年かに一度、内容について検証を行い、内容をブラッシュアップさせていくという仕組みをある程度作っていくということも大事なこともかもしれない。

委員の皆様から様々な貴重な意見をいただいた。協議会として本日のプログラム案の承認に異議がなければ、承認とする。手続的には、今後、議会、教育委員会に報告をした後に周知を図ることと併せて、印刷とホームページへのアップ等々を行っていきたい。印刷したプログラムは、各学校・園以外の子育て施設等にももれなく配布し、趣旨について記載するというのをやらねばならないと改めて思った。そういった形で進めるということではどうか。

では、(3)その他について、質問等がなければ、以上で案件を終了する。

<質問なし>

今後は、このプログラムの実践の段階に入るため、活用状況等々について意見を交わす場として、当協議会を必要に応じて開催したい。

それでは、これをもって第11回練馬区幼保小連携推進協議会を終了する。

(閉会)